

Hamlet と Horatio

Hamlet and Horatio

高山 浩子*

Hiroko Takayama

1. 序

Shakespeare の描く人物のうちで、Hamlet と Horatio くらい性格的に対照的な人物像はそうはない。Hamlet は情熱的な人物であり、Horatio は理性的な友人として描かれている。一見、Hamlet 劇ではその物語の筋において、Horatio はあまり関わっていないように思われるけれど、よく考えてみると、Horatio なしの Hamlet 劇では深みがないように思われる。それは作者 Shakespeare の一種の劇作上の手法であるが、対照的な人物を配置することによって、劇そのものに深みが増すと同時に、その補色的性格描写が人間の存在そのものの本質的な面白さを示している。

Hamlet を感情と情熱の人とすれば、Horatio は理性と知性の人であろう。Hamlet はその優柔不断さによって、行きどころのない情熱が彼の心を重くするが、Horatio は現象を自らの知識と経験から判断し、客観的に伝えようとする。Hamlet の飽くまでも主観的な態度に比べて、Horatio の客観性は引き立ってくる。

Horatio はまた、Hamlet の無二の親友の役割を演じている。この両者の間の友情が、この劇に一輪の花を添えているといえる。Hamlet

は Horatio の友情に支えられており、彼の苦悶の中にも一条の光のような絆がそこに見られる。復しゅうを主題とする暗い影のさす劇の中で、この両者の友情は光っているように思われる。

一般に人間の行動は知性と感性のバランスの上に成り立つのが妥当と考えられる。情熱を主題とする演劇も、必ずその対照的側面からそれが判断され、批判され、批評される。演技者が情熱的に振舞うほど、観察者はそれを知性的に追求し分析しようとする。演劇批評にはそうした土壌が存在する。Hamlet 劇では Hamlet 自身はまさに情熱的に主題を演じており、Horatio はそれを観察する側に立っている。こうした構成の面白さは、やはり Hamlet 劇の特質の一つであろう。そこで本稿では、そうした対照性を分析して考察しようと思う。

2. 理性と感情

人間の精神機能のうちでも、理性と感情はほとんど相対立する概念と考えられている。感情の激しい人でも、絶えずその感情を外に向けて吐露している者は、その感情が積み重なって暴走するようなことは少ない。ところが、その感情のエネルギーを外に向けずに内に向ける人は、

* 一般教育等

心の中のわだかまりが次第に大きくなっていき、ついに暴発してしまうことがある。Hamlet はどちらかというところのタイプの性格をもっている。

一般に人間の精神機能のうちで、理性と感情は非常に重要な役割をもつものであるが、通常、バランスを保っていることが多いし、またそれが望ましい状態であろう。ところが人によっては、どちらかが優勢である場合がある。そういうとき、その優勢な方がその人物の性格を表わすことになる。もとより Hamlet にも理性は備わっているのであるが、強烈な感情のエネルギーが先行してしまうのである。

二幕二場での独白で、Hamlet はこう言う。

O, what a rogue and peasant slave
am I!
Is it not monstrous that this player
here,
But in a fiction, in a dream of passion,
Could force his soul so to his own
conceit
That from her working all his visage
waned,
Tears in his eyes, distraction in his
aspect,
A broken voice, and his whole function
suiting
With forms to his conceit; and all for
nothing!¹⁾

[II. ii. 553-560]

彼は役者が虚構の出来事を感情込めて演じている姿に感動している。つまり Hamlet の心が劇中に入り込んでしまって、劇の人物に共感をもっているのである。完全な感情移入の原理がそこに働いている。彼が役者がその演ずる人物になりきっているということに感動しているのは、つまり彼自身、その虚構の人物の心理的状态がよくわかるからにほかならない。

Hamlet のそうした感受性の強さは、この劇

の到るところで見受けられる。しかも彼が仇とねらう Claudius 王も、そのことをよく理解している。

King. Love! his affections do not that
way tend,
Nor what he spake, though it lacked
form a little,
Was not like madness—there's something
in his soul,
O'er which his melancholy sits on
brood,
And I do doubt the hatch and the
disclose
Will be some danger; which for to
prevent,
I have in quick determination
Thus set it down: [III. i. 165-672]

Claudius は Hamlet の狂気に疑いをもっている。そこで王は、彼をイギリスに送ろう思う。王に心の動きを見すかされるほど、Hamlet の心の中の動揺はその表情と行動に出るのであろう。Hamlet が何か心に激しい感情のうっ積があって、そのため彼の態度が妙に落ち着かないことを、王ならずとも、妃も周囲の者たちもみな気づいている。もし Hamlet が Horatio ほど理性的であったら、彼自身も poker face で事に望んでいたであろう。しかし彼にはそんな振りはできないのである。彼は感情の捕らわれ人となって、深い精神的な迷い道を彷徨するのであった。

Hamlet の乗った船がイギリスへの航海の途中、海賊に襲われたが、彼はその海賊にもてなされてデンマークへ戻ったとき、Ophelia の葬式に出会ってしまう。Laertes が彼のことを罵っているのを聞き、感情の高ぶった Hamlet は隠れておられず、思わず飛出してしまう。

Hamlet [comes forward]. What is he
whose grief

Bears such an emphasis? whose phrase
 of sorrow
 Conjures the wand'ring stars, and makes
 them stand
 Like wonder-wounded hearers? This is
 I,
 Hamlet the Dane.

['leaps in after Laertes'
 [V. ii. 248-252]

ここで Hamlet は Laertes と取っ組み合いをはじめるのであるが、Laertes は王に宥められてこの場では引き下がる。Hamlet は Ophelia を愛する余り、その場の状況の判断も忘れて飛び出してしまうのであって、決して彼が初めからそう考えていたわけではない。そばにいた Horatio にも彼の行動を止められなかった。感情家の Hamlet の姿がそこにある。

この墓場での行動のあと、次の五幕二場で Hamlet は Horatio にこう語っている。

Hamlet. It will be short, the interim
 is mine,
 And a man's life's no more than to
 say 'One' ...
 But I am very sorry, good Horatio,
 That to Laertes I forgot myself;
 For by the image of my cause I see
 The portraiture of his; I'll court his
 favours:
 But sure the bravery of his grief did
 put me
 Into a towering passion.

[V. ii. 73-80]

Hamlet はここで、Laertes に対する行動を反省しているのである。そしてそれが、Laertes の嘆きの態度のあまりの激しさにあると考えている。自分が挑発されたように思われるのであろう。しかしながら、冷静に考えれば、Hamlet にもそれが誤りであったことがわかるのである。

感情家のもつ一つの特徴といえる。

これに対して Horatio は、Hamlet とは対比されるような冷静さをもっている。彼は状況を正確に判断して行動する。Hamlet がこう話しているときにも、彼は周囲に注意を払い、人の気配を察知する。それは王の使いの Osric であった。

Longman Guido to Shakespeare's Characters には、Horatio は Hamlet の universal friendであり、学者であり、哲学者であると記されている。²⁾ まさに Horatio は、事物をすべて理性的にまた論理的に考える。天地の道理に基づいて考えていくのである。Hamlet も Horatio のそうした公正さに強く惹かれているのであろう。三幕二場での Hamlet の言葉はそれを裏付けている。

Hamlet. Holatio, thou art e'en as just
 a man
 As e'er my conversation coped withal.
 (III. ii. 52-53)

Hamlet にとって Horatio はこれまで親しく交際した者のうちで、もっとも信用している人物である。Horatio は学者であり、したがって学問には通じていても俗界のことには疎い。したがって金儲けなどできないし、またそうした清純な感じが、Hamlet にはとても嬉しかった。友人としての信義を第一と考える Horatio に Hamlet は惹かれているのである。そこで彼はお世辞でなく本当に彼を信頼しているということを心から述べる。

Hamlet. Nay, do not think I flatter,
 For what advancement may I hope
 from thee,
 That no revenue hast but thy good
 spirits
 To feed and clothe thee? why should
 the poor be flatlered
 No, let the candied tongue lick adsurd

pomp,
And crook the pregnant hinges of the
knee
Where thrift may follow fawning ...
Dost thou hear? (III. ii. 54-60)

Horatio は Hamlet が心から自分を敬愛してくれることがわかる。Hamlet の正義、理性、天地の理を求める心が、Horatio にそれを見たのかも知れない。Hamlet は Horatio の清貧さが気に入っているのである。彼は続けてこう語る。

Since my dear soul was mistress of
her choice,
And could of men distinguish her
election,
Sh'hath sealed thee for herself,
for thou hast been
As one in suff'ring all that suffers
nothing,
A man that Fortune's buffets and
rewards
Hast ta'en with equal thanks; and blest
are those
Whose blood and judgement are so well
co-medled,
That they are not a pipe for Fortune's
finger
To sound what stop she please : give
me that man
That is not passion's slave, and I will
wear him
In my heart's core, ay in my heart of
heart,
As I do thee. (III. ii. 61-72)

Hamlet が観察するところでは、Horatio はどんな苦難に耐えても何一つ苦にするようなこともなく、運命に左右されずにいつも平然としているように見えたのであろう。さらに彼は、

Horatio が彼の望むような人物であり、感情の奴隷にもならない人間であると考えている。Hamlet は実際には自己の特質をよく知っており、それとは反対の性質をもつ者に憧れていたのである。D.G.James は、この台詞の64行目を取り上げて、Horatio は人生のあらゆる運も不運も平等に受け入れて、良いことは控え目に自分のものとし、不幸にはじっと耐える人だと説明している。³⁾つまり物事を理性的に処理する人物といえる。

Hamlet はこのように、自分の感情に溺れ易いと自ら考える反面、感情に溺れない理性を持ちたいと望んでいたのであろう。しかし、自己の特性から抜け切れず、絶えず感情のうっ積に悩まされているので、逆の特性をもつ人物を無意識に求めていたのである。そこへそうした理性的な精神をもつ Horatio が出現したのである。人間は自分の性質とは反対の性質に憧れをもつことがある。感情の優勢な Hamlet は、理性の勝った Horatio にそのような憧れの感情をもったとしても不思議ではない。Hamlet 劇で人間精神の見事な両極をなすこの二人こそ、まさに補色の関係にある人物配置であり、Shakespeare もそのことを強く意識して、Horatio を Hamlet 劇の中に据えたのであろう。そうした人物配置と人間観察の素晴らしさが、ここに見られるのである。

理性と感情とは、それが言語や行為に表われるとき、客観性と主観性が見られる。そこで次に、この両者について調べてみよう。

3. 主観性と客観性

感情の強い人は、その言語や行動が主観的になることが多い。それは、感情という精神の機能が極度に自己中心的に作用するからである。したがって感情が激しい人ほど周囲のことを気にかけず、また後の評判や批判を気にせず、感情の趣くままに振舞うものである。そのことが結果的には主観的であるとされるのである。この劇中でも、Hamlet の言動はまさしくそう

した様相を呈している。

これに対して、理性的に物事を見て判断する人は、周囲や世間や、道徳や戒律というような既成の概念を考慮に入れながら冷静な判断を下し、見解を述べ、行動をとる。こういう人は、自分の言動が世間の良識や天地の理にたがわず、しかも宗教や道徳という内的な規範にも外れないという判断をしてから表現や活動に移る。自己を外的な世界から見ているのである。こうした特性は Hamlet には極端に欠けているが、Horatio には生まれながらに備わっていると思われる。

一幕四場で、父王の亡霊を見た Hamlet は、Horatio たちの止めるのも聞かずその後を追おうとする。

Hamlet. My fate cries out,
And makes each petty artifice in this
body
As hardy as the Nemean lion's nerve;
Still am I called, unhand me gentlemen,
By heaven I'll make a ghost of him
that lets me!
I say, away! go on, I'll follow thee.
[I. iv. 81-86]

Hamlet はここで、父王の亡霊の出現に我を忘れて動天している。皆の制止を振り払うために剣を抜いておどかしている。親友 Horatio が傍らにいても拘らず、どちらかという夢中になっているというよりも錯乱した Hamlet には、周囲が目に入らない。まったく自己中心的な世界に没入してしまっている。亡霊のもつ恐怖や不安や危険というようなものは、いくら周囲が警戒しても本人にはその気持が何の作用も及ぼしていない。Hamlet はまったく主観的な世界にいる。

Hamlet. Does it not, think thee, stand
me now upon—
He that hath killed my king, and

whored my mother,
Popped in between th'election and my
hopes,
Thrown out his angle for my proper
life,
And with such cozenage — is't not
perfect conscience
To quit him with this arm? and is't
not to be damned
To let this canker of our nature come
In further evil? [V. ii. 63-70]

五幕二場の城内の広間で、Hamlet は Horatio にこう語る。彼は Claudius を殺して仇を打つのが自分の義務だと主張する。Claudius のような罪人を放置すること自体罪であると力説する。このことを Horatio に言うことによって、Hamlet はこれを Horatio が認めてくれると思ったのである。Horatio が認めるということは、客観的な道理が作用すると思われたのであろう。ここで Hamlet は、自己の正義を立証したくて、Horatio の理性に訴えるのである。

五幕二場で Hamlet が語る話は、Claudius 王が Hamlet をイギリスに送って殺害しようとしたことが中心で、その奸計から彼は如何にして生還したかを物語っている。それはもちろん Hamlet の台詞として話されるのだが、Horatio が聞くことによって、彼の身の上に振りかかったその間の一連の出来事が、事実としての客観性を帯びてくる。

その客観性が一番強く感じられるのは、この劇の最終の場面である。Hamlet が Horatio にデンマークでの出来事の真相を世の人々に明らかにすることを依頼する。Hamlet の弁明を Horatio がすることになるのである。こうして Hamlet は死んでいき、Horatio が生き残って、気高い精神をもった若き王子 Hamlet の物語を後世に伝え、世界に伝えることになる。そうした責任を Horatio は負うことになるのである。それはこの劇の終局にふさわしく、Hamlet の悲劇を Hamlet の立場で伝える役

を Horatio が担う。そうしてこの物語が正しく人々に伝えられ、語られるという仕組みがそこにある。

Horatio をここに登場させて、あたかもこの劇の立会人のような役割をもたせることによって、Hamlet のことが客観的に伝えられることになる。

Horatio は Hamlet が死んだ直後、そこへやって来たノールウェイ王子 Fortinbras とイギリスの使節にこう語る。

But since, so jump upon this bloody
question,
You from the Polack wars, and you
from England,
Are here arrived, give order that these
bodies
High on a stage be place'd to the
view,
And let me speak to th'yet unknowing
world
How these things came about; so shall
you hear
Of carnal, bloody and unnatural acts,
Of accidental judgements, casual
slaughters,
Of deaths put on by cunning and
forced cause,
And, in this upshot, purposes mistook
Fall'n on th'inventors' heads: all this
can I
Truly deliver. [V. ii. 373-384]

Horatio は Hamlet から頼まれたことをこの場でもうすでに実行している。ノールウェイとイギリスという、デンマークにとっては外国の人に真実を伝えて、Hamlet の名誉を守っているのである。Horatio はここで語部^{かたりべ}として登場することになる。そして Hamlet の悲劇に関わる一切の事実を世間の人々に語るというのである。こうして Horatio の存在は、そこで

さらに輝きを増すのである。

4. 友情

Hamlet は Horatio と固い友情で結ばれているように思われる。Horatio は一幕一場において、城壁で先王の亡霊を見たことを、まず Hamlet に伝えなければならないと思う。少しでも Hamlet に関わりのあることならば、知らせるのを義務と思うのである。

Break we our watch up and by my
advice
Let us impart what we have seen
to-night
Unto young Hamlet, for upon my life
This spirit dumb to us, will speak to
him:
Do you consent we shall acquaint him
with it,
As needful in our loves fitting our
duty? [I. ii. 168-173]

彼は先王の亡霊が語りかけても彼等に口をきかないので、きっと王子ならば語り出すであろうと思った。そこで“in our loves”と Hamlet 王子への友情を示してこの出来事を Hamlet 王子に伝えようとする。これは Horatio の義務というよりは、彼の Hamlet に対する友情の表われであろう。

義務という Horatio の思い込みは、一幕二場で繰り返される。

Horatio. As I do live my honoured
lord 'tis true,
And we did think it writ down in our
duty
To let you know of it. [I. ii. 221-223]

こうして Horatio はまず Hamlet へ報告することが義務であると彼に語るのであるが、

その思い込みは前述のように友情にほかならない。Hamletの身の上の事に関心があるので、そうした考えをもつに至ったのであろう。

Hamlet は Wittenberg に留学していたことは一幕二場の Claudius 王の

…For your intent

In going back to school in Wittenberg,
[I. ii. 112-113]

という台詞からわかる。彼は留学先から父王の葬儀のためにデンマークへ戻ってきていたのである。この場で、Hamlet が独り残り独白をしていると、Horatio が Marcellus と Barnardo と共にやってくる。Horatio は Hamlet と会って挨拶をし、二人の会話が始まる。

Horatio. Hail to your lordship!

Hamlet. I am glad to see you well:
Horatio—or I do forget my self!

Horatio. The same, my lord, and your
poor servant ever.

Hamlet. Sir, my good friend, I'll change
that name with you.

And what make you from Wittenberg,
Horatio?

[I. ii. 160-164]

ここで我々には、Horatio も Wittenberg で学んでいることがわかる。つまり二人は学友であることがわかるのである。Hamlet は Horatio に“Sir, my good friend,”と親しそうに言っている。彼はデンマーク人ではないのかも知れない。彼がデンマークの王族と無関係なことが、Hamlet にはもっとも安心できたのかも知れない。つまり利害関係のない人物だからである。それに、学問で結ばれているのであるから、友情として強い。利害が絡んだ友人関係であると、ちょっとした利害で亀裂が入ることがある。

Wittenberg は中世においても学問の盛んな

ところであって、当時としては非常に自由な雰囲気であったところである。しかもこの大学はヨーロッパでも有数の学問の府であった。二人ともそうした古都 Wittenberg で学問を通じて結ばれていたのである。

Hamlet は Horatio に会えて嬉しいのであるが、彼が何をしにデンマークへやってきたのか気になった。

Hamlet. I am very glad to see you—
good even, sir.

But what in faith make you from
Wittenberg?

Horatio. A truant disposition, good
my lord.

Hamlet. I would not hear your enemy
say so,

Nor shall you do mine ear that
violence

To make it truster of your own report
Against yourself. I know you are no
truant,

But what is your affair in Elsinore?
We'll teach you to drink deep ere you
depart.

[I. ii. 167-175]

Hamlet は Horatio が決して遊びになどやってくる訳はないと思う。Horatio はそれだけ真面目な学究の徒であると思われるのである。少なくとも Hamlet はそう信じている。

一幕五場で亡霊と話をした Hamlet は、Horatio が亡霊のことを聞いたときも、こう答えている。

Horatio. There's no offence, my lord.

Hamlet. [to Horatio]. Yes, by Saint
Patrick, but there is, Horatio,
And much offence too—touching this
vision here,

It is an honest ghost that let me tell

you-
For your desire to know what is
between us,
O'ermaster't as you may. [*to both*]
And now, good friends,
As you are friends, scholars, and
soldiers,
Give me one poor request.
[I. v. 135-142]

ここには Horatio のほかに Marcellus がいる。Hamlet は “As you are friends, scholars, and soldirs,” として二人のことを言っている。でもここでは亡霊の語った話の内容は述べていない。この辺に Hamlet の内向的性格が表われている。信用するに足る友人ならば、打ち明けて助力を請うのもよいと思うが、彼にはそれができない。友情を自己の行為の目的のために利用することを好まないのかも知れない。もちろん Horatio あるいは Marcellus に言えば、信義を重んじる彼等のことだから、必ず力になって Hamlet の行動を助けてくれた筈である。しかし彼はそのように積極的に友情を活用しなかった。

この同じ場の最後の台詞で、Hamlet はこの二人に向かって、真心をもってその好意に報いることを誓う。

このように Hamlet と Horatio は、お互いに理解し合っているが、Hamlet の性格から、その友情を自己の行動を助ける方向には利用しない。そして、Horatio は飽くまでも Hamlet の友人として客観的な支えとなっていたに過ぎない。しかしその友情は浅いものではない。というのは、五幕二場の最後の場で、Hamlet が傷ついて死にかけていると、Horatio は残った毒杯を取って後を追おうとするからである。しかし、Hamlet の頼みを聞き入れて、彼は Hamlet のために証人になろうとする。まさに厚い友情に支えられているといえる。

5. Hamlet 劇と合理性

Shakespeare 劇が上演されていた時代、つまり16世紀末から17世紀初頭にかけての時代は、まだ科学がそれほど発達しておらず、迷信が容易に信じられる雰囲気があった。したがって Shakespeare 劇の観客の多くも、妖精の存在を半信半疑で考えていたし、亡霊の存在の可能性も十分に信じていた。そういう時代背景にあって、Hamlet 劇が演ぜられたのである。したがって先王 Hamlet の亡霊は、劇中の主人公王子 Hamlet のみならず、観客によってもその存在が半ば認められていたといえる。

Horatio はデンマークの Elsinore 城の城壁の上で、Barnardo と Marcellus とが先王の亡霊を見たというのを聞いて、それは見たという者の幻覚だと言う。そこで Marcellus が Horatio をその現場へ連れてきて事の真偽を確かめさせることになる。その現場へ来た Horatio は、なおもこう言い続ける。

Horatio. Tush, tush, 'twill not appear.
[I. i. 30]

しかし、この確信はすぐに崩れることになる。亡霊がそこへ出現したのである。

Shakespeare はここで、天地の理に通じた学者 Horatio を登場させ、彼に亡霊の現場を見せることで、王の亡霊の存在を、この劇の中で揺るぎないものとしている。Horatio が亡霊の存在を信じたということは、つまりこの劇の中で先王 Hamlet の言う言葉に信憑性があることにもなると思われる。

そこで学者 Horatio が、この現場を目の当たりにして、Barnardo の問いかけに彼はこう答える。

Barnardo. How now Horatio, you
tremble and look pale,
Is not this something more than
fantasy?

What think you on't?

Horatio. Before my God, I might not
this believe
Without the sensible and true avouch
Of mine own eyes. [I. i. 53-58]

Horatio は冷静な学者であるが、この信じられないような亡霊の出現に、青くなって震えているのである。彼のこれまでの信念が覆ってしまったからである。それと同時に、未知の体験とその底知れぬ恐怖に、思わず動揺したのである。

Horatio は、これはきっと王の亡霊であるかも知れないと思う。その亡霊の身なりが、彼が知っている先王 Hamlet の戦場での姿とそっくりであることを認めるのである。

Horatio. As thou art to thyself.
Such was the very armour he had on,
When he the ambitious Norway
combated,
So frowned he once, when in an angry
parle
He smote the sledded Polacks on the
ice.
'Tis strange. [I. i. 59-64]

理性に勝れ、博学なインテリである Horatio が超自然の現象を認めるということで、この物語が始まるのは、まずそうした背景となる思想を作っておいてから劇を展開していこうという Shakespeare の手法によるものにほかならない。

この劇は、理性の劇ではない。感情の劇である。したがって、理性に対する感情の優位性を示すことも、その隠れた主題の一つとなっている。

一幕五場で、Horatio が亡霊の出現とその行動に驚いていると、Hamlet は彼にこう語りかける。

Hamlet. And therefore as a stranger
give it welcome.

There are more things in heaven and
earth, Horatio,
Than are dreamt of in your philosophy
But come -- [V. ii. 165-169]

あらゆる学問に通じる博学な Horatio にも、世界のすべては理解できない。Horatio の哲学は万能なものではなく、人智の限界を示したものである。ここでは感情の人 Hamlet が理性の人 Horatio に勝っている。Shakespeare がこの劇で描きたかったものは、やがて次第に姿を現わしてくる大陸の合理主義に対する一種のアンチテーゼとも考えられる。人間には計り知れないような神秘が、この世界には充満しているのを、Shakespeare は感じ取って、理性万能の時代に先がけて、その優位性を否定したと考えられる。彼は Horatio の哲学が合理的なものであるとするならば、非合理的な哲学の存在も、予見し強調したと思うのは考え過ぎであろうか。イギリスには合理主義の哲学が根づかなかったのも、もとを正せば、この Shakespeare の思想にそれがあって、理性よりも経験へと向かわせたのかも知れない。

いずれにしても、合理主義の立場、合目的的な理性の対応は、*Hamlet* 劇からは感じられない。不合理な、すなわち理性に合わない論や行動が、この劇では優先している。Hamlet の行動も合目的的であるとは、決して思えないものばかりである。その場の思いつきの言動が目立つ。しかしこれも、作者 Shakespeare の意図したところかも知れない。反理性主義の立場では、かなりの程度説明がつくように思われる。

当時の人々にとって演劇は、知識と言語の習得の場であったとも考えられる。したがって Shakespeare が戯曲で示したことは、庶民の知識や言語の土台となったともいえよう。それゆえ、Shakespeare 劇に触れた人々によって、彼の意図する感情の世界を世の人々に伝えることは、充分可能になったことと思われる。一般に、

西洋演劇においては、理性よりも感情に中心がおかれ、もっぱら感情移入によって劇が観賞される。そして登場人物が観客と同じような精神的弱点をもつならば、なおさら同情を買って、感情移入が盛んになる。*Hamlet* 劇は、その点で普遍性をもったものである。

6. 結 論

これまで見てきたように、*Hamlet* 劇では主人公 Hamlet に対して、Horatio という人物を配することによって、Shakespeare は演劇上もまた心理上も、絶大な効果をあげている。Horatio はこの劇の中では、いわば脇役であるが、しかし単に刺身のツマ程度のものではなく、Horatio の存在があってはじめて Hamlet という人物像がくっきり浮かび上がってくる。それは料理でいえば隠し味であり、色でいえば補色である。こうした Horatio の存在が *Hamlet* 劇を一段と引き立っていると言っても過言ではないであろう。

Hamlet は普通の人よりも鋭い感性をもっていて、何事にも敏感である。感情の起伏が大きく、分裂的な気質をもっている。そして、感情のエネルギーが外に向けられずにいるのである。それは、王の宮廷で周囲には王の腹心の者が多いからである。外に向けられない感情のエネルギーが、内に向けられるとき、そこに大きな心の葛藤が起こる。そこで彼は、絶えず悩まざるを得ず、ときには自己の存在さえも否定するほど悩んでしまう。これに対して Horatio は理性的、論理的に物事を考える。何事も自然の摂理として理解しようとする。感情の人 Hamlet と理性の人 Horatio の対比が、この劇を一層面白くしている。

Hamlet は自己の感情に溺れるために、物事を冷静な目で見られない。常に主観的な立場で物を考える。ところが、Horatio はこれとは対照的にすべて天地の道理から理解しようとする。Hamlet に言わせるとこれは Horatio の哲学である。この主観性と客観性の対比もまた、人

間の二つのタイプの実例でもあり、この劇の主要なテーマでもある。

次にこの両者の友情については、非常に厚いものであると言えるが、何故か Hamlet はその友情を積極的に利用しようとはしない。思うに、親友を危険な所へ巻き込みたくないという Hamlet の友情があったのかも知れない。しかし、自分の行為を正当なものとして評価し、これを後世に伝えることを彼は Horatio に遺言する。そこに“Horatio の友人としての存在価値があるように思われる。

さらにこの *Hamlet* 劇は、理性的な立場で観賞されるよりは、感情移入の原則に基づいて観られるべきものであることは確かであり、亡霊については合理性など適用できず、いちずに神秘的な出来事として、人智の及ばない領域のあることを前提として語られる。それには Horatio のもつ客観的合理主義の立場では理解できず、ただ Hamlet の感情を通じてこそこの世界を見ることになる。そして、そのことはまた、作者 Shakespeare の意図した感情を謳歌する精神に連なるものであって、大陸に起こりつつあった合理主義に反するものである。こうして、Hamlet と Horatio の両者の対比から、そういう結論に至るのである。

註

- 1) 本稿の text の引用はすべて Cambridge 版 New Shakespeare シリーズ, *Hamlet* による。
- 2) Kenneth McLeish, *Longman Guide to Shakespeare's Characters* (Essex; Longman, 1985), p.120.
- 3) D.G.James, "Moral and Metaphysical Uncertainty in *Hamlet*," *Shakespeare: Hamlet*, ed A.E.Dyson (London: Macmillan; 1968), p.82.